
続・聖剣士伝説リリカルなのは

マテマテフェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・聖剣士伝説リリカルなのは

【NZコード】

N6418M

【作者名】

マテマテフュイ

【あらすじ】

聖剣士の力を奪われメシアに人格を徐々に乗っ取られていくスウェン

フェイト達はスウェンを救うためにアルバークのもとへ向かう

第1話失う力（前書き）

聖剣士伝説リリカルなのはの続きです

第1話失う力

「それじゃあね、スウェン」

「ああ、また明日な」

スウェンはフエイトと別れ、自分の家へと歩いていく。自分の体の異変も知らずに…

「なんかやけに疲れるな…仕事のしすぎか?」

スウェンは制服のまま布団の上に転がると、なのははから連絡が来る

「スウェン君、起きてる?」

「どうしたんだ、なのは?」

「スウェン君、今すぐ時空管理局に来れないかな?」

「わかった、すぐ行く!??」

スウェンを一瞬、痛みが襲うが、すぐに消える

「どうしたの、平気?」

「ああ、今すぐ行く」

スウェンは携帯をしまい、家から出て、なのはに指定された場所へと向かう

「スウェン君、顔色悪いけど平気?」

「一応な、それで何があつたんだ」

スウェンが聞くと、魔力刃が飛んでくる

「スウェン君、後ろ!!!」

なのはに言われ振り向くと、魔力刃はスウェンに刺さる

「グッ…」

スウェンは何か魔力刃を抜こうとするが、魔法が発動せずだんだんと体内へ入る

「くそ…AMFか」

スウェンは仕方なく素手で抜こうとするが、魔力刃はスウェンに刺さる

「どうなってんだ?」

「どうしたの、スウェン君?」

「なのはか、なんかこれが抜けないんだ！？」

スウェンはなのはから距離を離す

「どうしたの、スウェン君」

「もう下手な芝居は止める、アルバーク！！」

スウェンが言うと、なのはの姿が消えアルバークが現れる

「お前の目的はなんだ？」

「君の力だ…聖剣士のね」

「何だと！？」

スウェンが驚くと、目の前に映像が写る

「君が素直に渡せば、彼女達に危害は加えない」

「俺が断れば…」

「こうなる」

映像の中のフェイトは血を吐き、倒れる

「だがそれはダミーだ、安心していい。だがもし断れば全員殺す」

「ふざけやがつて…」

スウェンはアルバークを睨み言つ

「さあどうする？君は仲間が、大事ではないのかね」

「わかつた力を渡す」

スウェンは体内から七色に光る玉を出し、アルバークに渡す

「確かに戴いた、それではな…」

アルバークが消えると、同時にスウェンに刺さっていた魔力刃も抜ける

第2話造られた命

アルバークが消えた後、スウェンはその場に倒れ血を吐いていた
「ハアハア…グツガハツ」

血を吐き続けスウェンの目の色がだんだんと青色から白色へと変わつて行き、髪の色も茶色から白色へ変わつて行く

「どうなちまつたんだ俺の体…駄目だ。何も考えられない」

スウェンは何とか立ちあがるが、体に力が入らず無理に力を入れると口から血が出た

「クッなんとかここから動かないと…」

スウェンは自分の体のことを考えず、無理やり立ち上ると全身から血が出て倒れる

「スウェン！！」

何とかフェイトはスウェンを支えるが、スウェンはもはや死人と同じ状態だった

「平気、スウェン？」

「フェイトか…ごめん迷惑かけて」

「今は喋らないですぐになのは達も来るから」

フェイトの言葉通りなのは達が来る

「フェイトちゃんスウェン君は？」

「今はあそこで横になつてもらつてる」

フェイトが指した方を見ると変わり果てた姿のスウェンがいた

「検査結果が出たよ。やっぱりスウェンは聖剣士の力別名フォースを抜かれてる」

「それじゃスウェンは…」

「かなり危険な状態にあるね。それにまだフォースの力はあまり解明されていない」

ユーノが言うとシャマルが来る

「あなたの予測どおりね今の彼はリンカー・コアを命の代用として生

きているわ」

「えつそんな事可能なんですか」

「不可能ではないよロストロギアの力を使えばね」

「ユーノはプレシア事件の時の映像を出す

「これがどうかしたの?」

「スウェンはもうこの時に致死量の血を流してゐる」

「それじゃ…スウェンはこの時にはもつ…」

「フェイトやなのはは涙を流す

「その時に一命を取り留めたのはおそらくロストロギアそれも過去に埋め込まれたね」

「それじゃ聖剣士の力は関係ないの?」

「いやおそらくはそのロストロギアを命の代用にするのに使用していたはずだ」

「それが外れたらスウェンは…死ぬ?」

「フェイトが言うとユーノは静かに頷く

「そんなのウソだよね…」

「いや本当だよだからこつして現にスウェンは少しでも長く生きようと体を少しずつ変えてるんじゃないか」

ユーノの言うとおり今のスウェンは9歳の頃の体に戻り髪の色ももとの色へと戻り目の色も戻る

「僕なら平氣だ…メシアがいるからね」

スウェンは立ち上がり言つ

「スウェン平氣かい」

「一応ねこの体ならまだ生活することも可能だ」

スウェンは笑顔で言つ

「でもあまり無理はしないでねスウェンまだフォースの力は全てわかつてないんだから」

「なら話すよ聖剣士の力それに僕について」

スウェンが言うと夜が明けた

第3話ロストロギアを命にするもの

「でもその体で無理しなくても…」

「でもいつかは話さなければならぬことだ。なら今ここで言つよ

スウェンは話し始める

「僕が聖剣士の力を手に入れたのはアリシアが死んだときなんだ」

「それってもしかしてアリシアがくれた力とか？」

「そうじゃないよ僕はあのときに声を聞いたんだ」

「どんな声？」

フェイドが聞くとノルンが降りてくる

「私が彼に預けたのです聖剣士の力を」

「そしてその後は君達言つとおりプレシアに捕まり聖剣士の力を奪われ死んだ」

「それじゃどうして生きてるの？」

「それが引き金となり僕の体内に埋め込まれていたエルデスファイアが発動して生きているんだ」

スウェンが言つとヨーノは調べ始める

「あつたエルデスファイアえつゝと何何、一度死んだものを適正が合えば生き返らせるロストロギアつてそれじゃスウェンは適正があつたのか」

「そう言つ事だね」

スウェンが笑いながら言つとノルンはスウェンの前に立つ

「あなたのエルデスファイアももうすぐ消えるでしょう

「それは何となく気がついたよ。それに僕は2度の人生を体験したんだ悔いはない」

スウェンが言つとノルンはスウェンからエルデスファイアを引きずりだす

「スウェンこれが私にできる最後のことです」

ノルンはスウェンの中に何かを入れ消えた

第4話 戻る命

「ノルンは僕に再び命をくれた」

「そりなんだでも身長は変わらないんだね」

「こればかりはきっと聖剣士の力を取り戻さないと駄目なんだよ」

スウェンが言うとフェイトはスウェンを抱っこする

「ちょっと放してよフェイト」

スウェンは顔を赤くしながら言つ

「スウェン君顔赤いね」

「なのは笑つてないで助けてよ」

スウェンが言うがフェイトは放そうとしない

「それじゃスウェン君のことお願いねフェイトちゃん

「わかつたよ」

「僕は一人でも暮らせる平氣だよ」

「駄目だよ一人じゃ危ない」

フェイトはスウェンを放そうとしない

「それじゃあ僕もこれで…」

「ちょっと待つてユーノ助けてくれてもいいじゃないか」

「形は違えど好きな人と一緒に住めるならいいじゃないか」

「そう言う問題じやないだらう…！」

スウェンは怒鳴るがユーノは聞こえないふりをしてどこかへと行く

「それじゃ私達も帰ろうか…スウェン」

「一人で歩けるからそろそろ放してくれない？」

スウェンに言われフェイトはスウェンを下におろし手を繋ぐ

「これなら平氣だよねスウェンも」

「まあこれぐらいなら…」

「それじゃ帰ろうか」

フェイトとスウェンは手を繋ぎ帰つた

第5話 平和な時前編

あれから一日後スウェンはフェイトの家に住んでいた

「どうして僕はここに…」

「はいスウェン、ご飯だよ」

フェイトは嬉しそうに言つ

「ありがとうフェイト…」

「呼び捨ては駄目だよスウェン。お母さんやママを付けて呼んでね

！」

「わかつたよフェイト母さん」

スウェンが言うとフェイトは笑顔になりスウェンにご飯を食べさせる

「フェイト僕なら一人で食べられるよ」

「駄目だよ食べさせてあげるから口を開けて」

スウェンは仕方なく口を開けご飯を食べさせてもらつ

「後片付けは僕がするよ」

スウェンが食器を持とうとするフェイトが止める

「怪我をしたら危ないから私がするスウェンは休んでて」

フェイトに言われたとおりスウェンは椅子の上で休む

「ちょっとフェイト過保護すぎじゃないかおかげで結構疲れた」

スウェンが言うとなのはから連絡が来る

「どうしたのなのは？」

「いや、一人きりの生活楽しんできるのかな」と思つてね

なのはは笑いながら言つ

「でもスウェン君も大変でしょフェイトちゃん過保護だから」

「もしかしてなのは知つてたの？」

「当たり前だよ、そう言えればスウェン君はいなかつたんだっけ

なのはが話すと、ヴィヴィオの声が聞こえる

「本当だよスウェンパパ小さい」

「なつヴィヴィオビうしてそれを…」

「スウェン誰と話してるの？」

突然のフェイトの声にスウェンはフェイトのほうを向く

「何でもないよフェイト母さん」

「それならいいけどスウェン今日は仕事だよね一緒に行こうか」

「うんわかった」

スウェンが頷くとフェイトは自分の部屋へと向かう

第6話 平和な時後編

「スウェン準備できた?」「
フェイトが聞くとスウェンは頷く
「それじゃそろそろ行こつか」
フェイトと手を繋ぎスウェンは時空管理局へと向かう
「なんか大きいね~」
「仕方ないよ。スウェン体小さいこと忘れたの?」「
「あつそうだけ」
スウェンが言うとフェイトはスウェンの腕を引っ張り中へに入る
「みんなおはようーー!」「
「あれ、今日はやけに元気がいいですね」
「そうかな?」
フェイトは赤くなりながら言つ
「それよりなのは達は?」「
「そう言えばいつもの場所で待つと言つてていたよ」「
「ありがとうわかった」
フェイトとスウェンは急ぐ
「なんだろうなあの少年?」「
「うーんもう少し大きければスウェンさんに見えなくもないけど」
全員が話し合っている最中にスウェンとフェイトはいつもの場所へ
来る
「おはようなのは」「
「おはよう一人とも」「
「おはようなのは…」「
スウェンが言うと後ろからシグナムが斬りかかる
「反射神経は衰えていないようだな」「
「もし衰えていたらどうする気だつたんですか」「
「その時はその時だ」

シグナムは剣をしまい言つ

「それよりスウェン君フロイトちやんのことを母さんって呼んでたよね」

「いや正確には母さんだよ」

「お母さんと呼んだ事には反論はしないんだ」

スバルが言つとヴィヴィオがスウェンに向かつ

「本当に小さいスウェンパパでも本当に戻れるの？」

「さあ、どうだらうでも聖剣士の力が戻ればきっと戻れるよ

「戻れないときはどうする気スウェン君？」

「さあ、わからないよ。未来のことなんて」

スウェンが言つとアルフが来る

「なあスウェンその姿でいても問題ないのかい」

「一応ね！？」

スウェンは突然苦しみだし倒れる

「スウェンどうしたの平氣！？」

フェイト達が見ると田の色が紫になり体の半分は漫画やアニメキャラなどに出てくる悪魔などの体になっていた

「くわいひひひ」

「スウェン本当に平氣なの？」

「今はそつとしといたほうがいいかも」

「わかつたよでも本当に平氣なのかな」

フェイト達は心配しながら見ているとコーノとクロノが来る

「遅かったか……」

「えつどう言つ事」

「エルデスフィアあれにはバッド効果もちやんとあったんだ」

「どんな…？」

フェイト達が聞くとコーノはデータを出す

「これは…」

「そうだよエルデスフィアには体内に毒を入れる効果があつたんだ」

「えつ…毒…？」

なのはが驚くとスウェンの口から血が出る

「平気なのスウェン」

「まだ後5時間の猶予はあるよでも今のスウェンは戦力外だ」

「誰を倒せば助かるの？」

「アルバーク・サイシン彼を倒せば聖剣士の力はスウェンに戻る筈だよ」

ユーノが言つとフェイトは飛びだす

第7話はやての恋人

「フロイトちやんび」行くの?」

「アルバークを倒してくる」

「ちょっと待つてよ~フロイトちやん!~」

なのはが止めるがフロイトはどこかへ行つてしまつ

「なのは、フロイトのことは平氣だと思つよそれよつ今は...」

ユーノはスウェンを見る

「確かにやばそうだもんね」

なのはが言つとシャマルや「ウが来る

「あれ、「ウ君久しぶりだね」

「なんだよ。その妙な反応は?」

「ウは驚く

「はやてちやんはそつにばばど」?」

「それが...」

なのはが聞くと「ウは冷や汗をかく

「やつと見つけたで~「ウ君」

「いや何しに来たはやて...」

「とぼけるんやないで最近時空管理局なんで休んでるや?」

「いや何の事ださつぱりわからん」

「ウが言つとはやは笑いながら「ウに魔法弾を撃つ

「こきなり何をするんだ...はやて?」

「ウが見るとはやてに殴られ吹き飛ぶ

「何やつてんの?」

「なんでもないそれより病人は?」

「あそこだけ?...」

なのはが指をさすと小さい頃のスウェンが倒れていた

「何故、スウェンが小さくなっているんだ?」

「そんなことどうでもいいから早く連れてつて」

「わかつたそれじやあな
「ウはスウホンを抱あわの場から離れる
「はやてちやん」ウ君とつまくこてないの
「こや～れうこうわけやなこんやけど…」
はやは顔を赤くしながら言つ
「あつやうひままだ仕事が残つてゐんもつたそれじやあなのは
ちやん」
はやしゆべりかくと走つ去つた

第8話条件

「どこにいるの…アルバーク」
フェイトは周りを警戒しながらアルバークを探す
(こうしてゐる間にもスウェンは…)

フェイトがそう思つてゐると、肩をたたかれる

「誰!？」

フェイトが振り返るとそこにはアルバークがいた

「あなたは…」

「お初にお目にかかります。私はサイ・アルバーク」
「あなたがアルバーク…あなたのせいで」

フェイトはバルディッシュを握りアルバークに向ける

「やはり私を探していましてか。フェイト・T・ハラオウン」

「あなたに聞きたいことがあります。アルバーク」

「聖剣士の力を返せそうですね」

「わかつてゐならおとなしく渡してください」

フェイトが言うとアルバークはフェイトに向けて魔力弾を放つ

「こんな場所でいきなり魔力弾を…」

「積もる話もそれぐらいにして私の話を聞いてくれますか

「どんな話ですか」

「ここにする事ではありません。そうですねあの公園なんてどうですか」

フェイトは頷きアルバークについていく

「それで何の話ですか」

「聖剣士の力返してあげなくもないですが、条件があります」

「条件とは一体何?」

「あなたが勝てば返して差し上げます。ただしあなたが負ければ…

あなたはこの世界より消えます」

アルバークが言うとフェイトはB-1を着てアルバークを見る

「なるほど… 条件を飲むと言うのですね」

「当たり前だよ。そして聖剣士の力は返してもらひつい！」

フェイトが言うとアルバーグの戦闘態勢に入る

第9話命を賭けてでも守りたいもの

「フォトンランサー……」

「甘いですね。その程度では」

アルバークはフォトンランサーを弾き笑う

「どうしましたもう終わりですか?」

「そんな訳……ない!!」

フェイトは真・ソニックフォームになりアルバークに斬りかかる

「はあああああ」

「甘いですよその程度のスピードでは…私は捉えられません」

アルバークはフェイトが振り下ろすバルディッシュを止める

「不完全でもこれだけの力が素晴らしいですね聖剣士とは…」

「クッ…」

フェイトは吹き飛ばされ何とか態勢を立て直すがバルディッシュは
砕け散る

「そんな…バルディッシュが」

「決着はつきましたねそれではさよなら」

アルバークがフェイトに止めを刺そうとすると魔力弾が飛んでくる

「アルバーク…フェイトから離れる!!」

「そんな体で無理をしなくてもいいでしょに」

アルバークが言うと背中から羽が生えたスウェンがいた

「スウェンその姿」

「フェイトには関係ない俺個人の問題だ」

「ふざけないでよ。スウェンその体本当に平気なの」

「俺が自分の意思を保つていられるかが問題だが必ず守つてやる」

スウェンが言うとアルバークはスウェンに向けて魔力刃を投げる

「はあああああふん!!」

気合だけで魔力刃を弾き手に持っている小さめの魔力刃が付いてる
ナイフをアルバークに向ける

「どうしたのですか。スウェン何かをするのでは？」

「うぐっ…何をした貴様」

「さあなんだろうかね？」

アルバークが言うとスウェンは血を出し倒れる

「さあもう死ぬがいい…」

アルバークがスウェンにつきつけるとフロイトのまづから聖剣士の力を感じる

「止めて…それ以上スウェンに近づかないで…！」

「何…？」

アルバークが驚くのと同時にフロイトは魔力を帯びた手刀をアルバークに当て聖剣士の力をスウェンへと入れる

第10話 想い出

「あれ…」
「フェイトが目を覚ますとベッドの上だった
「起きたか…」
「コウでもどうして私はここに…？」
「あそこで倒れていたのを俺が運んできたそれだけだ」
コウが言つとフェイトは周りを見る
「ねえスウェンは？」
「さあなだが確かにことはこれを渡せと言われたことぐらいだ」
コウはフェイトに手紙を渡す
「これ誰が渡したの？」
「スウェンだ」
コウが言つとフェイトは読み始める
「フェイトありがとうな聖剣士の力を取り戻してくれてでもそれは
もう受け取れないそれにもう俺は時空管理局へ戻れないだから自書
する後は幸せになフェイト スウェン・レイクより」
「スウェン本当に死ぬ気な」
フェイトは手紙を潰し立ち上がりつとするとがつまく立てなく倒れる
「無理をするな今の状態ではまともに行動はできな今はなのは達
に任せらるんだ」
「でもスウェンは自ら命を断つとしている」
フェイトが言つとコウの電話が鳴る
「俺だぞ」
「今…フェイト…連れて…公園」
「何を言つてるのか聞こえないぞはやて…！」
「コウは叫ぶが電話の向こうから聞こえるのはノイズ音だけだった
「くそ…行くしかないのか」
「ちょっと待つて私も行く」

フロイトはコウニ言つたがコウは向もじやべりすに連絡が途絶えたで
ある場所へと急いだ

第1-1話メシア覚醒

「ずいぶんと遅かったねフェイト…」

「そんな…スウェン?」

「違うよスウェンは死んだ今の僕はメシアとして覚醒したんだ」

「ずいぶんな物言いだなだが隙だらけだ」

「ウは自身の『デバイス』『ジークフリート』を出しメシアに向ける

「さあ言えこの距離なら外しはしないはやて達はどこだ」

「そんなに熱くななくてもすぐに会わせてあげるよあの世でね!」

!

「貴様!」

「コウはジークフリートでメシアを突き刺すが感触が全くない

「どう言う事だ」

「さすがはジークフリートだ一突きされてたら危なかつたかもね」

メシアは笑いながらコウを見る

「笑つてないで降りてこい」

「これは失礼君にも騎士道精神があるのかな」

「そんなものはもう捨てた」

「コウはジークフリートを構えメシアを見る

「フェイトはどうやら『デバイス』がないようだね」

「そんな事は今は関係ない行くぞ!…」

「そんな単調な攻撃に当たるとでも!…」

突然槍が曲がりメシアに当たる

「多少はアレンジしてある俺の使いやすいようにな」

「なるほど君達を見くびっていたようだもう手加減はしない!…」

メシアは自分の目に腕を入れ目を取る

「紹介するよこれが僕の『デバイス』『デビルソウル』さて始めようか

第2ラウンドだ」

「いいだろ貴様は俺が倒す」

「本気で言つてるの？」

「当たり前だ」

「コウが言つとコウの周りに何かが現れる

「なんだ…これは？」

「コウが驚いているビジークフコートがもとのペンダントに戻りB」
も消える

「何が起きている」

「もう消えなよ…『デスゲイル!!』

「コウはメシアの放つた魔法に当たり倒れる

第1-2話 罪は自分の手で

「さてとこれで邪魔者は全て消えた後は……」

メシアはフェイトを見る

「なんで逃げるのフェイト」

「あなたはスウェンじやないスウェンは仲間には誰よりも優しかった」

「僕は君だけには危害は加えないよ……フェイト」

「寄らないで……」

フェイトが言いつとメシアは笑う

「まだあいつのことを信じてるのかいもう無駄だよスウェンの意識は死んだ」

「そんな訳ないスウェンはいつだつてみんなを守るために命を賭けていた」

「だから何僕があいつに負けるとでも?」

メシアが言いつと後ろから魔力弾が飛んでくる

「まだ生きてたのか君達もしぶといね早く死ねば楽だつたのに」

「まだ死ねないよ皆の明るい未来を勝ち取るまでは」

「そうだなこんなことで諦めては機動六課の名に傷がつく

「それにスウェン君にはまだ働いてもらわなあかんのや」

皆が言いつとデビルソウルが光りだす

それと呼応するようにフェイトの手に握られていくクライスマスターが光る

「なら君達はまとめてこの僕が塵一つ残さず消滅させてやるよ」

「止める……」

「……」

突然の声に全員が驚く

「貴様どうやって意識を出していいる?」

「俺の意識にみんなが呼び掛けてくれたからさ」

「僕はメシアだこんな場所で死にはしない消える、消える
「無駄だメシア俺はもう自分の自我を取り戻した後は…」

スウェンはフェイトを見る

「フェイトお前に俺の残っている力を全て渡す後はようしづな
「スウェンそれって…」

フェイトが言うとクライスダストは勝手にバーストブレードモード
になる

「ターゲット確認ディメンジョンホール形成刀身固定完了」
「止めて…スウェン…！」

「ディメンジョンブレイカー…！」

クライスダストはフェイトの腕から離れスウェンの胸へと突き刺さる

「貴様、血迷つたか」

「俺は冷静だぜ。メシア…」

「僕はこんな場所で消えるべき存在ではない…まして貴様などと
「俺だつてお前なんかと心中する気なんかさらさらねえよ」

スウェンは血を吐きながら言つ

「僕はここにいるもの全てを殺してでも生き延びる

「お前は俺と共にここで死ぬんだ」

「ふざけるな！僕は必ず生き延びる貴様のよつな下等生物とは違つ
んだ」

「誰にでも平等なのは死だけだましてやそれがいかに優れていよう
とな」

スウェンが言うとクライスがさらにスウェンへ突き刺さる

「スウェン…！」

「来るな！これが俺なりのけじめだ」

「調子に乗るなまだ僕の最後の力を使えば…？」

「お前にもはや奥の手は残されてないこの一撃に全てを賭けたから
な」

スウェンが言うと遂にクライスダストはスウェンの心臓を貫通する

「ぐおおおおおおおお」

「ぬあああああああ

「平気なのスウェン！！」

「フエイト……皆……それじゃあな……」

スウェンは消えその場にはクライスダストが残った

「スウェン君は自分の命と引き換えに世界に平和をもたらせたんだね」

「でも…これで満足なのかなスウェンは」「仕方無いよフェイトちゃんでも確かにスウェン君が死ぬ必要あつたのかな」

「これでまた俺の知る戦友が一人消えたか」「コウが言うとはやてに殴り飛ばされる

「いきなり何をする」

「まだスウェン君は死んだとは決まってないで」

「それはそうだがあの場合死んだと判別する以外にないと思つが」「だから君の理屈はええねん今はスウェン君を探すことが最優先やはやてが言つと田の前から誰かが来る

「もう少しで消されるとこらだつた」「もしかしてスウェン?」

フェイトが向かうとコウに止められる

「今は迂闊に近づくな彼がスウェンと決まった訳ではない

「でもメシアでもないかもよ」

「それにメシアなら攻撃してるはずだし」

「だが迂闊に近づいては…」

「コウが止めようとすると何かがフェイトに近づく

「危ない!!」

「えつ…」

フェイトが振り返るとそこには片目が青で片目が黒の男がいた

「俺は…誰だそして君は…」

「私はフェイトあなたはスウェンだよ」

「スウェン…その名は懐かしいな…!!」

フェイトの腹を殴り男はフェイトを掴む

「さあ出てこいスウェン僕と戦え」

「俺は無駄な人殺しは避けたいおとなしく退いてはくれないかメシ

ア」

先ほどの少年がスウェンへと変わる

「どうしても退いてほしいのか？」

「無理なお願いだとは分かっているだがこれ以上お互いに血を流して何になる

「ふざけた事をぬかすな僕は君に勝つそして世界をすべてリセットする」

「お互い運よく残った命だ俺はこの命を無駄に使いたくはない」

スウェンが涙を流しながら言うとメシアは斬りかかる

「隙だらけだな僕の勝ちだ！！」

「残念だがもうお別れだ…じゃ あなメシア

「ふざけるな僕はまだ死ぬわけには…」

メシアは今度こそ光になり消えた

「スウェンー！」

フェイトはスウェンに抱きつくる

「心配かけたなフェイト」

「つづんよかつた無事で」

フェイトは涙をふき言う

「今度こそ本当に終わつたんだよね」

「ああ、メシアもアルバークもこの世界から消え去つたもう脅威は消えたはずだ！？」

スウェンは何かを感じ取つたのかフェイトを放す

「下がつていろ何か得体の知れないものが近づいてる」

「確かにこれは普通の人間の感じはしないな」

スウェンとコウが言うと目の前の空間が歪み何かが出てくる

「名を名乗れ」

「我の名はスサノオ全銀河の遺志によりこの世界はフォーマットする」

「何だと！？」

スウェンとコウはデバイスを構えスサノオ見る

「この世界は持つてはいけない力を持つたよつて消滅させる」

「ふざけた事を言つたこの世界に生きる全てのものを殺す氣か」

「その通りだこの世界は危険だいづれ全ての世界を滅ぼす」

「それが本当だとしたら貴様はさじすめ断罪者と言つ事だな」

コウが言つと剣を出す

「だがこの世界を滅ぼす前にやらねばならぬ事があるようだ」「何だ急に気配が！？」

スウェンは油断など一瞬もしていないのに吹き飛ばされる

「グッ…なんだこいつのでたらめなパワーは」

「ほつあの一撃を防ぎきるとはなかなかやるな」

「何とかあいつの射程内から離れないともう一撃食らつたらさすがにまずい」

スウェンは意識が朦朧とする中スサノオを見る

「どうした来ないのかなならばこちらから行くまで……」

スサノオはスウェンへ剣を振り下ろす

「ふんはあああああ

「はあああああ

何とかスウェンは踏ん張るが徐々に地面に埋め込まれていく

「貴様はこれで終わりだ」

「何！？」

スウェンが見るとスサノオは上空へと飛び思いつきり剣を振り下ろす

「神魔滅殺剣！！」

スウェンに当たりスウェンは血を吐き倒れる

「つまらんな、この程度か

「グツ…ガハツハアハア」

スウェンは何とか立ちあがりスサノオ見る

「さあ来いよまだ俺は戦えるぜ…」

「なるほど我が最終奥義を持つても倒せぬ敵がなかなか面白いな貴様名は？」

「スウェン・レイク」

「スウェンか貴様のような猛者がいるのではもう少しだけ楽しみたい我が最終奥義五蓮刃斬が完成した時この世界の命運を決める最終決戦をする」

スサノオはその言葉だけ残し去った

「何とかなつたか…」

「スウェン…！」

フェйтはスウェンを抱えなのは達のもとへ戻る

フェイト編1 話戻る平和

「うう…」には…？

スウェンが目を覚ますと病院のベッドの上だったそして横ではフェイトが寝ていた

「起きろフェイト…」

「スウェン体はもう平気なの？」

「まだ少し痛むが別に問題はない」

スウェンが言うと看護婦が来る

「あらもう回復したんですか」

「多少痛みますけど一応回復はしました」

スウェンが言うと先生が来る

「容態はどうかね」

「まだ完全回復とまでは行きませんが一応徐々に回復します」

「さうかそれは良かった時空管理局の方には私から伝えてあるしばらくは安静にするんだよ」

先生が出て行くとフェイトも準備をする

「それじゃ私も行くね後で皆でお見舞いに来るから」

「ああ、仕事頑張れよ」

フェイトは笑顔で病室を出て行く

「何か必要なものはありますか？」

「いや今は何もない何かあつたら呼びますから」

「そうですかそれじゃ…」

看護婦は出て行く

「グッ…あいつの一撃思つたよりも重かつたらしいな」

スウェンは服を脱ぎ痛みが来る場所を触ると血が出ていた

「ふう~何とか致命傷は避けられたようだが血が出てるのは同じか」

スウェンは自分の魔法で血だけ止め廊下へと出た

フェイト編2話すれ違つ心

「フェイトちゃん～スウェン君の容態どうだった？」

「一応は回復に向かつてゐるよ後でお見舞いに行くとは言つてあるよ」

フェイトが言つとコウが来る

「あれ、コウまた任務？」

「それが何故だか知らないがこの任務を本当に受けた奴が風邪らしく俺に回ってきたんだ」

「大変そうだねコウ君」

「自分のスキル上げだと考えればそれほど辛くもない」

コウはそのまま時空管理局を出て行く

「相変わらずだねえコウ君」

「はやても大変だね」

二人が話しているとスバルとはやてが来る

「あれ～一人とも今日は休みだつたんじや……」

「そうやでなんでここにあるんや？」

「えつ…そんな事言つてた？」

「私も聞いてないけど…」

「人が言うとはやはては説明する

「今日から一週間時空管理局は休むやで」

「それと同時に魔導師全員分のデバイスは使用が禁止されます」

「それって魔法が使えないってこと?」

「そう言つ事になりますね」

スバルが言つとフェイトは空を見上げる

「どうしたんやフェイトちゃん?」

「別に何でもないよ。それよりみんなでスウェンのお見舞いに行かない?」

「別にええけどフェイトちゃんだけで行けばいいやん」

「スウェンだつてみんなに会いたがつてるつて」

フェイトに言われスバル、なのは、はやはスウェンのいる病院へと行く

「それにしてもいつ来てもきれいやな」

「そうだね～ヴィヴィオやスバル達それに私も一度入院したからね

」

「ここだよ」

フェイトがドアを開けると窓が開いておりスウェンの姿はなかつた

「スウェン君いないね」

「すぐに戻つてくるやろ」

「そうですよスウェンさんは抜け出す人じや ありませんし」

3人が話しているとフェイトは手紙を見つける

「何だろ…この手紙？」

フェイトが広げると所々に赤い染みが付いていた

「どうしたのフェイトちゃん？」

なのはがフェイトのほうに行くとフェイトが抱きつく

「えつ…！？どうしたのフェイトちゃん」

「スウェンはこの病院内にはもついない」

フェイトは驚くなにはに手紙を見せる

「スウェン君がまさかそんな事がある訳ない」

なのははユーノに連絡を取る

「ユーノ君今すぐスウェン君のデバイス反応を割り出して」

「わかつたよ…」

ユーノが調べると反応は海鳴市からだつた

「ありがとうねユーノ君こっちの仕事がすんだらすぐ行くよ」

なのは、フェイト、スバル、はやは海鳴市へと急いだ

フェイト編3話拒絶

「急ぐか…」

「スウェンは腹から血を出しながら目的地へと急ぐ
「見つけたよスウェン君…！」

「なのは一体何しに来た…」

「スウェン君どこに行こうとしてるの？」

「お前達には関係ない」

「スウェンが言うとフェイト達も来る

「邪魔をするな…」

「スウェン君一体君に何が？」

「俺の前から消えろ…！」

「スウェンは衝撃波をなのはに向けて飛ばす

「はああああ

突如現れたコウにより衝撃波は消される

「コウ君どうしてここにあるんや？」「

「俺の任務はスウェンを捕まえる事だ」

「…！」

その場にいる全員が驚く

「訳が分からぬわかるように説明してよコウ…！」

「これは時空管理局の決定だよつて貴様を逮捕する…！」

「ウはジークフリートを向け言つ

「なのは…どう言つ事？」

「たつた今通信できたよほら…」

「なのはが見せるとそこには逮捕状が出ていた

「なんでスウェンが…」

「理由はわからないでもクロノ君達は危険と判断したんだ」「でも理由ぐらい教えてくれても…」

「組織はそう言うもんだよフェイトちゃん何時でも最善な策を取る

それがかつての仲間だろうとね

なのはもレイジングハートを構える

「でも私は…」

フェイトは悩む

「フェイトちゃんもしかしてスウェン君を助けようとしてるの？」

「だって私にとつては一番大事な絆だし私は何があろうとスウェン

を信じると決めたから」

フェイトはバルディッシュュをなのはに向ける

「それが答えなんだね… フェイトちゃん」

なのはもレイジングハートをフェイトに向けると同時に次元震が起きる

「クッ… 遅かったか…」

「クロノどうしてこ…」

「何としてもスウェンを止めるアルハザードに行かせるな…」

クロノの号令で魔導師が一斉にスウェンに狙いを定める

「待つてクロノ、スウェンと話をさせて…」

「ふざけるな… これは全次元世界の問題なんだそんなことわせる訳には！？」

魔導師全員にバインドがかかる

「みんなは私達が止めるからフェイトはスウェンのほうに行きな

「ありがとうアルフ、ユーノ」

フェイトはスウェンの前に来る

「なにをしに来たフェイト…」

「スウェンあなたがどこに行こうと私は待ち続ける」

「はなしはそれだけかなら失せろ俺はもうお前の知っている俺じゃない

」

「そんな事はどうでもいいよスウェンはスウェンだから私はいつもでも待ち続けるあなたの事を信じてるから…」

フェイトが言うと光の壁ができる

「スウェン… 私は待つて必ず帰つてくるとだから…」

「フェイト……それじゃ あな……」

「！？」

フェイトは魔力弾を撃たれ吹き飛ぶそれと同時に光の壁は消えスウェンの姿は消え箱だけが残つた

フェイト編4話彼からの贈り物

スウェンが消えてから5日後の朝フェイトは目を覚ます

「ここは…」

そこは時空管理局の部屋の一室だった

「フェイト聞こえるか…」

「クロノここは一体?」

「そんな事は関係ない何故あんな事をした」

「それは…」

フェイトは黙りこむ

「あれ程、プライベートと仕事は分けると言つた筈だ」

「でもスウェンをなんで追つてたの?」

「それは…機密事項だ」

クロノが言つとフェイトはクロノを睨む

「そんな訳のわからない命令を聞いてスウェンを捕まえろなんて無理だよ」

「フェイト時空管理局が信じられないのか?」

「理由を話してくれれば信じられるかもしれないけど今はスウェンを信じる…!」

「その意思変える気はないのか例え捕まつたとしても…」

フェイトは頷く

「そうか…わかったもう帰つていー」

「えつ私は捕まるんじゃないの?」

「いいから早く出るそしてここに行くんだ」

「ありがとう…クロノ」

フェイトはクロノにお礼を言い出て行く

「あなたにはがっかりですねえそれも家族愛ですか?」

「何とでも言え俺はフェイトの幸せだけは壊したくないだけだ」

「ですが作戦の第一段階は一応は成功しましたですから今回は大目

に見ましょう」

「俺はこの後どうすればいい？」

クロノが聞くと男はクロノに何かを渡す

「あなたはそれを誰のデバイスでもいいので入れてください」「お前の目的はなんだ？」

「私の目的ですか全ての次元世界から魔導を消すことです」

「何の為に？」

「これ以上は今のあなたには言えませんそれでは」さげんよつ「男は消えクロノは渡されたデータチップを見る

「フュイトちゃんこつちこつち」

「あれ…なんでなのはが？」

「実は渡すものがあつてね」

なのはは指輪を渡す

「あの～なのは気持ちは嬉しいけど受け取れないよ」

「フュイトちゃん何か勘違いしてない」

「これはなのはが私に渡す指輪でしょ」

「違うよこれはスウェン君が置いて行つた指輪なの…」

なのはが言うとフュイトは笑顔になる

「それ…本当？」

「当たり前だよそれと共にこの紙渡されたんだ～」

「この紙？」

二人が見るととんでもない事が書かれていた

「時空管理局に戻るな…」
手紙にはそう書かれていた

「スウェン君何が言いたいのかな?」

「きっと時空管理局はもう敵の手に落ちてるか? みたいんじゃないかな」

二人が話してると「ウとコーノが来る

「一人とも逃げるんだこの世界から」

「どう言う事?」

「元機動六課並びにその協力者に逮捕状が出てるんだ」

「そんなことありえるの?」

話していると周りを囲まれる

「囮まれたか…だがこの程度なら」

コウはジークフリートを地面に刺し地面に転移魔法を出し全ての魔道師を消す

「今の内に退くぞ…」

「でもどこに逃げるの?」

「海鳴市と言いたいけどどうせもう罠が敷かれてるできれば時空管理局が把握していない世界が好ましいな」

「それなら一つだけ思い当たる世界があるよ

「それはどこフェイトちゃん?」

「確かに次元世界エルガストだけスウェンに連れられて一度だけ行つたんだ」

「そこならいいかもねなら急いで準備を」

「コーノが準備を完了するとエルガストへと飛ぶ

「ここがエルガストか確かに綺麗だし魔力もあるね」

「それでどこに行くんだ?」

「スーザン村に行こうと思つ

「わかつた探してるからみんなは周りを警戒してくれ」
こうして時空管理局を抜けた4人の物語は始まるのだった

フェイト編6話最初で最後の共同戦線

アルハザードスウェンは今そこに来ていた
「フェイト達逃げ延びてるよな…」
スウェンは空を見て言う
「最近アルハザードに来るのが多くないかしら
「こっちだつて好きで来てる訳じゃないそれにこの世界から異常な
怪電波が出てるんだ何か知らないかプレシア?」
「相変わらず態度が悪いわねスウェン?」
「うつ…すいません」
「まあいいわその怪電波ならアリシアが分かる筈よ
「アリシアもう動けるのか」
スウェンが聞くとアリシアが抱きつく
「スウェン久しぶり…！」
「ああ、元気だつたかアリシア」
「私は元気だよでも何しに来たの?」
「ミッドチルダにこちらから怪電波が送られているからその原因を
調べにきたんだ」
スウェンが言うとアリシアはスウェンをじっと見る
「どうかしたのかアリシア?」
「ねえスウェンもしかしてフェイトと喧嘩した?」
「いや別に喧嘩してないけどどうかしたのか」
「いや喧嘩してないなら別にいいんだけどさ」
アリシアが言うと何か威圧感が近づいてくる
「なんでこんな場所にスサノオが…」
スウェンが言つた通りスサノオが姿を現す
「奇遇だなこんな場所で巡り合つとは」
「スサノオ貴様何しに来た」
「どうやら貴様の狙いと我の狙いは同じらしくな」

「何だと…」

スウェンはクライスダストをしまいスサノオを見る

「我の狙いはクルスの撃破だそして貴様の狙いはこの怪電波を消す事だろ?」

「何故それで目的が同じになる?」

「簡単な事だこの怪電波はクルスが出している」

「つまりはクルスを消せば怪電波も止まるそう言つ事か

スウェンが言うとスサノオは笑う

「そこで今回は一時休戦し共同戦線と行こうじゃないか」「なら条件がある

「何だなんでも一つだけ聞いてやる」

「俺の仲間を傷つけるな!!」

スウェンが言うとスサノオは頷く

「では交渉成立だ最初で最後の最強タッグさて始めるか

「だがあ前がピンチになろうとも助はしないからな

「平気だ我は自分の身は自分で守る貴様こそ殺されるなよ

「俺はまだ約束があるこんな場所じゃ死ねはしない

二人は怪電波の出でる場所へと急ぐ

フヒイト編 7 話エルガストへ…

「おじこれからビニに行く氣だ」

「怪電波が発生しているのはここだけではないそれに全ての世界の怪電波を止めなければこの世界の怪電波は止まらない仕組みだからな」

スサノオが言うとアリシアが来る

「どうしたんだアリシア？」

「はい、お弁当」

スウェンとスサノオにアリシアはお弁当を渡す

「ありがとうなアリシア！」

「何故に我にまで…」

「何かお父さんの感じがしたからかな？」

「そうか…一応貰つておこう」

スサノオとスウェンはエルガストへと向かう

「どうしたんだスサノオ？」

「これが人の優しさと言つものなのか？」

「そうだなそうかもな」

「そうか…戦いだけが生き甲斐だつたがこんな生活もいのかもな」

スサノオが言うと目の前に光が出る

「さあ着いたな…」

「スウェン…！」

スウェンが後ろを振り向くとフヒイトが抱きつくる

「でもなんでスウェンがスサノオと一緒になんだ」

「色々あつてね今は協力してもらつてる」

「それが貴様の言つ大切な物のか」

「まあなお前にもあるだろ大切な物の」

スウェンが聞くとスサノオは剣を出す

「どうしたんだスサノオ」

「来る…」

スサノオが言うと何かが落ちてくる

「久しぶりとでも言うべきかな皆さん」

「お前は…メシア何故こんな場所に?」

「面白そうなゲームだからね僕も協力させてもらおうと思つてね」

「遊びじゃないんだぞメシア」

スサノオが言うとメシアは笑う

「それとスウェンとフェイトにノルンから贈り物だ」

「中身は聞いたんだろ」

「なんでもこれから戦闘には絶対必要なものだつても」

スウェンとフェイトは受け取りデバイスに装着する

「急ぐぞ怪電波の原因まであと少しだ」

新たにメシアを仲間に加えるのは達は向かう

フロイト編8話いつまでも…

「あれが怪電波の原因だ」

「ずいぶんでかいね〜」

「それに魔力ダメージは一切効かない例えなのはバスター3スター
ーライトブレイカーでもね」

「そこまで言わなくても…」

なのはが落ち込むとスサノオは剣を出し斬りかかる

「刻異無限斬！…」

スサノオが切り裂くと中からスサノオが現れる

「なにこれ…」

「やはりかクルスの考えそうな事だだがそんな子供だましで我は退
かん」

スサノオが斬りかかると消える

「あれって幻影？」

「その類だろうな」

「ウは何かを食べながら言つ

「でも平気かスサノオ」

「我を誰だと思っているそれにこの程度の策我の前では無意味だ！」

！」

「ひゅ〜凄いさすがはスサノオだね」

「メシア貴様死にたいか？」

スサノオが睨むとメシアは怪電波装置の残骸を見る

「ずいぶんと派手に壊したもんだなスサノオ」

「我は加減を知らないからな」

スサノオは剣をしまいスウェンを見る

「あれからどれぐらい強くなつたのか貴様の実力が見たいな」

「ああいぜなら次の装置は俺が壊してやる…！」

「そこまでだ反逆者ども」

「案外早かつたねクルス」

スウェン達が見ると時空管理局の魔導師を従えたクルスがいた

「ほう、あなたがスウェンですか？」

「お前がこの元凶を起こしてるクルスか…」

スウェンはクライスマスターを構える他のみんなも構える
「そんな物騒なものはしまって話し合いをしましょうよ」

「断る…！」

スウェンが言うとクルスは笑いフェイトへ向かう

「遅いんだよ…！」

「何故私の行動が…」

スウェンはクルスを斬る

「あなたはいずれ私が手に入れます絶対にね」

クルスは消える

「何かスウェン君つて人気だね男の人には」

「ぶつ…気持ちが悪い事を言うな」

「赤くなつてかわいい」

「それより次の場所に急ぐぞ」

次の怪電波を壊す為に急いだ

「おい、「ウ何食べてるんだ?」「携帯食料だお前も食うか?」

「いや結構だ」

スウェンが言うとスサノオとユーノが話していた

「貴様の状況分析能力は凄いな」

「あなたも初めて会った時に放っていた気迫を感じませんが?」

「我自身も驚いていた戦いだけが生き甲斐だったのにこんな事になつてしまつてな」

スサノオはアリシアからもらつたお弁当を食べ始める

「これが人の優しさか…」

「あなたも誰かを愛せばきっと人間の心の素晴らしさに気付くはずですよ」

「我はもしかしたら戦いのない生活をしたいのかもしない」「今あなたならできますよ」

ユーノが言うとスサノオは空を見る

「貴様も誰か守るものがあるから戦うのか」

「僕には戦う力はないでも大切なものを守りたいから」「ここのいるんだ」

ユーノは皆を見て言う

「そうか…すまなかつたなこんな戯言を聞かせて」

「いえあなたにもできるといいですね守りたい人が…」

ユーノはそう言うと皆のほうへ行く

「どうした戦いの神とまで言われたお前が何か迷いごとか」

「メシア、貴様は奴らに敗れたんだつたな」

「うつ…それは言つなよ…でもあのときのスウェンやフェイト達は凄かつたな」

「ならば行くか…」

とうとう田の前に一個田の怪電波発生装置が現れる

「今日は俺の番だよな」

「いや我が行く」

「なに言つてんだよ」

「頼む我がままを聞いてくれ」

スウェンは黙つて下がる

「済まないな」

スサノオは剣を出し幻影と戦う

「グツ…」

「スサノオ！…」

「来るな私は今新しいものを掴もうとしてるのだ…！」

スサノオが言うと空が光り何かが落ちてくる

「ようやくわかりましたかスサノオ」

「どこにいるんだノルン！」

「守る物のない力はただの暴力ですが守るために振るう力はその人の思いそのものです」

「なるほど貴様らしい物言いだなノルン」

スサノオが言うとノルンは笑う

「もうあなたは掴んでいます後はその思いを具現化するだけですよ」

「これが思いの力が悪くはないな行くぞ…ルシファオン…！」

スサノオは新たな力を持ち幻影をねじ伏せる

あれから10日後全ての世界に置いてあつた装置は壊れ今アルハザードに来ていた

「本当にいいのかスサノオ」

「我はこの一人を守るために力を振るつスサノオはアリシアとフレシアを見て言つ

「そうか…じゃ戦いの件は…」

「もう我は世界など賭けず真剣に貴様と勝負がしたいクルスを倒したら改めて決闘してくれるか」

「ああ、いいぜでも俺だつてそう簡単には負けないからな」

「二人とも準備いいそろそろ行くよ」

なのはに呼ばれスウェンとスサノオは向かう

「いよいよ時空管理局との全面対決だね」

「問題ない」

「我の道を阻むものは排除するだけだ！！」

「よし…行くぞ！！」

スウェン、スサノオ、なのは、コーン、メシア、フェイト、コウはミッドチルダへと着く

「ようやく来たな皆…」

「はやてか…」

コウが言うとはやてが前に出る

「邪魔をするなはやて！！」

「うちらの仲間になれば戦わずに済むで」

「俺は悪には力を貸さん」

「なら死ぬんや！！」

はやてが魔力砲を放ちとスウェンはデバイスを回転させ魔力砲を消す

「はやて、俺が相手をしてやる…！」

スウェンが言うとコウが止める

「はやては俺が止める」
「なら私はスバルとティアナ」
「私はエリオとキヤロ」
「なら僕はその他の魔導師の相手をしようかな」
全員戦闘態勢に入り戦いが始まる

フェイト編1-2話大切なものを取り戻す為に

「スウェン、スサノオここは僕達に任せ君達ははやくクルスのもとへ行け」

「だが皆を正気に戻すなら俺たちも手伝つた方が…」

「いや我らは一刻も早くクルスを倒した方がいい彼らを氣絶させただけで正気に戻るかは分からぬからな」

スサノオに言われスウェンは先を急ぐ

「2対1そんのでも勝てるの？」

「勝てるかじやないやるしかないんだ！！！」

「そうだよ諦めさえしなければ不可能なことなんてないんだから」

「俺がはやての為にできるのはこれぐらいだならせめて助けたいと思つからな」

「コウが言つとヴィータのハンマーが振り下ろされる

「まだ認めた訳じやねえがはやてを助ける為だ今は手を貸してやる」

「そう言う事だテスタロッサ行くぞ」

「フェイト～私もいるよ～」

「彼に頼まられてきてみればなかなかいい場面だつたようだね」

「ヴィータ、シグナム、アルフ、スカルエッティが来る

「シャマルとザフィーラはスウェンの手伝いに向かつた」

「後はヴァイスそれにギンガか」

「でもどうしてここに？」

「彼に頼まれたから私が彼女たちをかくまつたのだ」

「スカルエッティが言うとスバルが殴りかかる

「今までの私だと思つてもらつては困るな…」

「！！」

「スバルが驚くと何とスバルのデバイスに亀裂が入つて行く

「どうしたそれほど驚く事でもないだろつ君達のデバイスは私には無意味だ」

スカルエッティが言うと今度はエリオとティアナの連携攻撃が来る

「当たれば強力なのだろうが私には効かない」

スカルエッティは一人のデバイスを持ち粉々にする

「これが私が君達と戦い学んだ秘策だ。何も戦闘不能にすればいい

んだならデバイスを壊すのが一番手つ取り早い」

「確かにそうだけどデバイスはそんじやそこいらの攻撃じやびくともしない」

「それに下手に握りつぶそうとすれば自分がやられかねない」

フェイントとユーノが言うと時空管理局の中で爆発が起きる

「早く行きたまえここは私達に任せ君たちは彼の援護を」

スカルエッティが言うと「ウを残しなのは達は侵入する

「君は何故残る？」

「大切なものを取り返す為だ」

「ならば彼女には手を出しあしない君個人の力で頑張るのだな」

コウはただ一人ではやての前に立つ

フロイト編13話「守るために散る命」

「見つけたぞクルス」

「貴様に逃げ場はないおとなしく觀念するんだな」

「私が何の考えもなしにこんな場所にいるとでも思ったのですか？」

「クルスが笑うと時空管理局のあつちこつちで爆発が起きる

「クルス…貴様ああ…！」

スウェンは魔法を唱えようとすると発動しない

「無駄ですよスウェンさあおとなしく最期を迎えるさい」

クルスが魔力砲を撃つとスサノオが盾となる

「平気か…スウェン」

「スサノオなんで俺を庇つた？」

「貴様は死んではならない貴様を死なせれば悲しむものがいる」

スサノオが言うと来栖は笑いながらスサノオとスウェンに向けて魔力砲を撃とうとする

「戦いの神と恐れられたスサノオがまさかこんな風に最期を迎えるとは傑作ですねえ」

「我を笑うかそれもいいだが我とつて己の宿命を忘れた訳ではない」

「あなたに何ができるのですか死にかけのあなたに…！」

「我が初めて触れた優しさそれを壊すもの全てが我的敵だ…！」

スサノオが言うと傷が回復していく

「貴様死に底ないの分際で…！」

「我を阻む事貴様では不可能だ…！」

スサノオは魔力砲を消しクルスを掴む

「今こそ我が使命果たす時だ」

スサノオの下に魔法陣が何重にも発動される

「スサノオ…何をする気だ止めろおおおお」

「さらばだ…スウェン貴様との決着つけたかったがな…？」

スサノオが魔法を発動すると同時にクルスはスサノオを刺す

「あなたと心中などする気もありません地獄へはあなた一人で行きなさい」

「我は何もできずただ唯一の繋がりだった彼女達すら守れないのか

…

スサノオは倒れそのまま息は途絶える

「スサノオ…お前が守りたいもの必ず俺が守るだから少しだけ力貸してくれ…」

スウェンがスサノオに触るとスサノオの中から光が出てスウェンのデバイスの中に入る

「俺は貴様を許しはしない人をもてあそぶ貴様はな…」

「あなたが私を倒すそんなことできる訳がないでしょ」

クルスが笑うとスウェンの目から血が出てスウェンの姿が変貌する

フェイト編14話命を賭けた最後の死闘

フェイト達は壊れた時空管理局の中を登つて行く
「今…スサノオの放つていた気が消えた…」
ユーノが言うと皆はスピードを上げてスウェンのもとへと急ぐ
「どうやらスサノオは負けたようだね」
「だがこちらはどうにかなつた後は彼らに全てを託すとしよう」
スカルエッティとメシアは言う
「何者だ貴様…」
「俺は魔導師だ」
「そんなばかでかい魔力を持つ魔導師など聞いたことがない」
クルスが言うとスウェンは自分自身の『デバイス・クライスクルス』を握りクルスを見る
「俺はあの時にすでに人間とは違う存在になつていたのかもしねない」
「そうだ貴様は化け物だ魔導師などではなくな…」
「だがこの感情は俺が人間である唯一の証拠だ」
スウェンが言うとフェイト達が来る
「ならばその思い私が碎いて差し上げよう」
クルスはフェイトに向けて魔力砲を放つ
「俺はもう誰も失いたくない…」
スウェンが言うとフェイト達をバリアが包む
「スウェン…」
「すぐに終わるいや必ず終わらせる」
「まだ私を倒そうと考えているのですか」
「それが俺が唯一スサノオにできる事だからな…」
スウェンが言うとメシアが来る
「僕の力も使えそうすればあいつは倒せるぞ」
「済まないノルン今は力を借りる…！」

ノルンと融合すると片目が銀色、片目が金色になる
「クルスお前の最期だ！！」

スウェンがクライスソウルを刺すと光になり消える

「ハアハア終わったのか?」

「奴の感じはもうしない」

メシアが言うとスウェンの姿がもとの姿に戻る

「さすがに疲れた」

「まあ無理もないだろうあれだけの大魔力を放出したんだからな」

「メシアが力を貸してくれなきゃ負けてたよ」

「僕も君と出会ってスサノオ見たく人間の可能性を信じてみたかつたからな」

メシアが言うとフェイトやなのは達が来る

「スサノオさん死んじやつたんだ」

「俺のせいでなだが俺がスサノオにできるのはこれぐらいだけだったからな」

スウェンはスサノオの傍に行き動かないスサノオを見る

「できればあんたとの決着つけたかったな」

スサノオの目を閉じスウェンはなのは達と共に時空管理局を出る

「フェイトもう平気だ」

「スウェン無理はしないでね」

フェイトが言うと空が裂けその奥には現れるはずのないものが現れた

「あれは…アルハザード何故あれがあそこに?」

スウェンが疑問に思うと凄い魔力がスウェン達を襲う

「グッなんて魔力だ」

「こいつはやばいかもなこつちは能力を使いきつている今ここでクルスが復活でもしたら…」

メシアが言うとスウェン以外の魔導師がどんどん引き寄せられていた

「なにが起きてる?」

「僕に聞くなだがどんでもない事が起きている事だけは確かだな」

メシアが言うとなのはやフェイト達まで吸い込まれていく

「メシアあれを止める方法ないのか？」

「そんな方法ある訳ないだろそれに僕達は吸い込まれない」

メシアがそう言つとアルハザードが崩壊し中からノルンが現れる

「時間がありません…スウェン、メシアあなた達が最後の希望です

必ず彼を止めてください…」

「ノルン訳が分からぬもう少しわかりやすく説明しろ」

「あなた達に託せるこれが最後の力です…」

ノルンはスウェンにある宝石を託し他の魔導師と共に消える

「そんな…フェイト達の気配が」

「彼女達だけじゃないこのミッドチルダにいるのはもう僕達だけだ」
メシアが言うと何者かが降りてくる

「クルス…貴様」

「今の私にはあなたでは勝てませんこの世界の真理に触れた私には
ね」

クルスが言うとスウェンはクライスソウルを出しクルスに斬りかかる
「止める今無駄に魔力を消費するな」

「だがこいつを止めなければいはずは全世界が…」

「あいつはノルンや他の魔導師を吸収しているんだそんな奴に勝て
るとでも思つてるのか」

「俺はまた大切な人を守れないのか…」

スウェンが言うとクルスはスウェンへ歩み寄る

「これが私とあなたの差ですいい加減に觀念しなさい」

「俺は必ず彼女たちを救いだす例えこの身が碎け散ろうとな」

「わかりませんね。他人の為に自分の命を賭ける理由が」

「フェイト達と過ごしわかつたんだ人は誰かを守る時に無限大の力
が出せると…！」

スウェンが言うとクライスソウルが光りその場に落ちているデバイ
スがスウェンのもとへと集まる

「フェイト、なのは、クロノ、はやて、「ウそしてみんな俺に今一
度だけ力を貸してくれ…！」

スウェンが言うと全てのデバイスが一つの光となりクライスソウル
の中へ吸い込まれる

「なるほどなそれがあなたの答えですか」

「そうだこの力こそ俺の全てだ…！」

スウェンが言うとメシアと融合した時見たく羽が生えるだがその羽

はノルンと同じ白い羽だった

「クルスお前を倒す為なら俺は人間ではなくもとの俺に戻る」
スウェンが言うと背中から光が放出される

「それが本当のあなたですか」

「そうだ皆から忌み嫌われた姿だ」

スウェンが言うと同時にクルスは苦しみだす

「貴様まさか…ノルンとの同調をしてるのか」

「クルス俺の大切な人たち返してもらうぞ」

スウェンがクライスソウルを刺すとクルスは消えフェイト達が戻つ
てきた

フェイト編最終話同じ道の上

あれから一週間ノルンとメシアは消えスウェンやフェイト達ははもとの生活へと戻っていた

「スウェン~」

「フェイトどうしたんだ?」

スウェンが聞くとフェイトはスウェンに何かを渡す

「はい。誕生日ケーキだよ」

「フェイトに俺の誕生日なんて言つたけ」

「ユーノから聞いたんだよスウェンを驚かせる為にね

フェイトは笑顔で言う

「ありがとう…フェイト」

スウェンもお礼を言つとはやで、ユーノ、コウ、なのはが来る

「スウェン君それ何?」

「わかつたバースディケーキやな」

「スウェン君きょう誕生日だつたんだ」

なのはが驚いてるとユーノがスウェンに近づく

「なるほどねフェイトが聞いてきたときはなんでかなと思つたけど
こう言う事が」

ユーノが言うと時空管理局へと着く

「それじゃスウェンまた後でね」

「ああ、後でな」

スウェンはなのはと共にいく

「それにもスウェン君アツだね~」

「なのはとユーノもうまく行つているんだろう」

「まあ一応はね…」

なのはと話してるとスバルが来る

「おはよ~」

「相変わらず元気だなスバル」

「まあ元気が一番だけね」

なのはが笑いながら言うとスバルがスウェンとなのはにタイ焼きを渡す

「なんだこれ?」

「何つてタイ焼きですよ」

「見ればわかるけどなんでタイ焼き?」

「今ミッドチルダだとちょっとしたブームなんですよ」

スバルが言うとエリオが来る

「すいません兄さんそれとなのはさんキヤ口見ませんでしたか?」「いや見てないな」

「ごめん私も知らない」

「そうですかありがとうございました」

エリオはキヤ口を探しに行く

「それじゃあなスバル」

「はい仕事頑張つてくださいね」

スバルに見送られスウェンとなのはは部屋へと入る

「でもこのタイ焼きどこで売ってるのかな?」

「スカルエッティやナンバーズが売っているんだ」

スウェンが言うとなのはは驚く

「それどういう事?」

「昨日そう言えば広告が入つてたなと思つてな」

「そなんだ…」

なのはが言うとセイが来る

「失礼しますこれを渡せと言わされたので渡しに来ました」

「済まないなセイ」

「いえお構いなくこの後少々つるさい馬鹿が来ますが無視して結構です」

「その言い方酷いな僕だつて人間なんだぞ」

セイとライはいい争いを始める

「そう言えばヴィヴィオは?」

「ヴィヴィオならスウェン君の後ろにいるよ

「え“つ…」

後ろを振り向くと確かにヴィヴィオがいた

「スウェンパパ大好き!!」

「ヴィヴィオ離れる君のお父さんはユーノだろ?」

「え~パパとママはヴィヴィオには一人いるんだよ

「何だよそれ…」

スウェンが言うと呼び出しが聞こえスウェンはクロノのもとへ向かう

「どうかしたのかクロノ?」

「スウェン君の体に異常はないのか?」

「まあ一応はな」

「ならないがスウェンの体は身体検査だけじゃわからないことだらけなんだから無理はするな」

スウェンはクロノに言われ出て行く

「さて仕事に行くか」

なのはのもとへ戻ると大変なことになつていて

「なのは何を遊んでるんだ?」

「違うよ助けてよ~」

何があつたのか知らないがヴィヴィオとセイ、ライがなのはを囮んでいた

「セイ、ライお前達そういうええばヤハビリだつした」

「死にました」

「階段から落ちてな」

「人が言うとエクスカリバーが飛んでくる

「我を勝手に殺すとはいひ度胸だな」

「なにを言つてゐるだ~冗談に決まつてゐるじゃないか…」

「そうですよそんなこともわからないとは本物の馬鹿ですか

「我は馬鹿ではない」

ヤミは再びエクスカリバーを撃とつとするとスウェンに止められる

「頼むからこれ以上壊さないでくれ」

「仕方ないなマスターの命令ならしたがおつ
ヤミはしまいセイとライを連れ出て行く
「ようやく仕事に行けるな」
「そうだね」
「のはとスウェンは仕事へと向かつた

番外編1話スウェンとなのは（前書き）

番外編は全10話です

番外編1話スウェンとは

とある日の日曜日スウェンはいつものように起きて「」飯を食べていた
ただ一つ違うのはヴィヴィオとなのはがいる事だった

「おいしいねヴィヴィオ」

「そうだねなのはママ」

「人は笑いながら言うスウェンは黙々と食べ続ける

「何か言つてよ~」

「そうだよパパ」

「じゃあなんでここにいるんだ」

スウェンが聞くと昨日の事を話す

「そうか…皆で集まつて飲んだ後なのはがよつて俺が連れてきたと
そう言つてやる訳か」

「そうだよ大胆なことしたよねフロイトちゃんじゃなくて私なんだ
もん」

「スウェンパパなのはママと結婚したいの?」

「そう言つてやしないが…」

スウェンが言いかけるとチャイムが鳴る

「今出るね~」

「止めるーーなのは…!」

スウェンは止めるが遅くドアの前ではフロイトが待っていた
「スウェンビうしてなのはと一緒にいるの?」

「これには訳が…」

「スウェン君が私を昨日連れてきたんだよ~」

「そなんだ…」

フロイトはドアを閉め遠ざかって行く

「なあこれは俺が悪いのか?」

「当たり前だよ~完璧に誤解してるんじゃないフロイトちゃん?」

「なのはお前はユーノに誤解されたままでもいいのか

「私は別に平氣だよそなつたらスウェン君と結婚すればいいだけだから」

なのはが言つとスウェンはため息をつく

「ハア～どうやって誤解を解くかな」

「いつその事私と結婚する？そつすれば悩む必要もないよ」

「いやそれじや解決になんないだらうそれによーのが好きなんだろ」

「今でも私はスウェン君も好きだよ～」

なのはが笑顔で言つとスウェンはヴィヴィオを見る

「ヴィヴィオはユーノと俺ならどうかにお父さんになつてほし〜？」

「スウェンパパ！！」

「ほら～ヴィヴィオだつて納得してるし平氣だよ～」

「だが高町家が問題じやないのか」

スウェンが言うとなのはは紙を出す

「ここに書いてあるよスウェン君とも結婚はできますよつて…」

「なんでそんな事が…」

スウェンが頭を押さえるとなのはは笑つ

「それ本気じやないだらうな…」

「えつ…でも海鳴市のほづじや私とスウェン君結婚しての事になつてるから」

「意味が分からねええ」

「だから別に結婚しようとは問題はないんだよそれにユーノ君とフヒ

イトちゃんじいペアだと思つし」

なのはが言つと電話が来る

「ハア～出るのが怖いな…」

スウェンが出るとフヒトからだつた

「どうしたんだフヒト…」

「明日暇かな？」

「一応暇だけじどうかしたのか？」

その後約束をしてスウェンは電話を切る

「今のお話の内容からするとスウェンくん嫌われたね」

「スウェンパパ、フェイトイママと離婚?」「

「いやヴィヴィオまだ結婚していないから...」

「それじゃ絶交?」

ヴィヴィオに聞かれスウェンは背筋が寒くなつた

番外編2 話距離を置く二人

あれから一日後スウェンはフェイトと約束をした場所へと来た

「会うのが怖い…」

スウェンが考へてるとフェイトが来る

「『めんね待たせて』

スウェンは何もしゃべらない

「それじゃ行こうか…」

「ああ」

スウェンとフェイトはある遊園地へと入つて行く

「確かにそいつてスウェン君とフェイトちゃんが初めてデートした

場所だね」

「別れ話をするにはもってこいの場所やな」

なのはとはやてが言うとヴィヴィオは訳が分からず首をかしげる

「スウェン覚えてる?」

「何をだフェイト?」

「ここで約束した事だよ」

「あのときの約束か…」

スウェンが言うとフェイトは涙を流す

「どうしたんだフェイト」

「『めんねスウェンもう無理かな…』

フェイトはスウェンの前から走り去る

「あ～あ振られちゃったねスウェン君」

「見てたのか…なのは…」

「まあ落ち込まないでよまだ君の事をわかってくれる女性がいるつて言うがスウェン君は时空管理局ないじや人気なんだから誰でも結婚してくれるよなんなら私でもいいけど…」

なのはが言うとスウェンはフェイトの走っていた方向に向かう

「ずいぶんと一途だね～」

「でもあれぐらいこのほうがええやん！」君はそんなにしゃべりな

な～

はやでが言つとなのはも後を追跡していく

「どこにいるんだフュイト……」

スウェンはあたりを見渡しながら言つ

「駄目か…俺はもう完全に嫌われたんだな」

スウェンが諦めるとフュイトの声が聞こえる

「フュイトの声こっちからか」

スウェンが向かうとユーノと一緒にいた

「じめんね遅れてユーノ」

「僕の方こそ」「じめん急に呼び出して」

「でもなのははいいの？」

「もういいんだあんな冥王と一緒になるなんて僕には耐えきれない

からね」

ユーノが言つとなのはは倒れる

「それじゃ行こうか一人に気付かれる前に…」

「そうだね…」

ユーノとフュイトはどこかへと行く

「振られたんはスウェン君だけやなかつたんやな」
はやてに笑われスウェンとなのはは帰つた

「コウ…スウェン知らない?」
「いや見てないが…」
コウが言うとフェイトは寂しそうな顔をして時空管理局内に入る
「あ…スウェン…」
フェイトは声をかけようとしたが止めた
「スウェン君今日から長期休暇取るんだって」
「一応海鳴市に行こうと思う」
「そりなんだそれじゃ私も行こうかな」
二人は楽しそうに話しながら時空管理局を出て行く
「スウェン楽しそうだつたな…」
フェイトはスウェンの事を気にしながら仕事へと戻る
「ふう…これでいいだろ?」
「スウェン君荷造り終わつた?」
「ああ、一応な後は…」
スウェンは何かをした後外へと出る
「さて行くかディメンジョンホール」
スウェンが魔法を唱えると懐かしい風を感じる
「久しぶりだな海鳴市なんて…」
「そうだねスウェン君?」
なのははスウェンに抱きつく
「離れるなのは」
「別にいいじゃん海鳴市なら私達は夫婦なんだから」
なのははスウェンを見て言つ
「でも誰も知らないだろ」
「へつすずかちゃんとアリサちゃんは知つてるよ」
「まじですか」
スウェンが言うとダイヴィオも来る

「あつそれとつこでに、ヴィヴィオは私達の子供と言つ事になつてゐるから」
「年齢的におかしいだろ」
「細かい事は気にしてない」
「そうだよスウェンパパそれともヴィヴィオのパパがやなの？」
「ヴィヴィオに言われスウェンは別にそんな事はないという顔をする
「それじゃ私達の実家へゴーゴー」
「なんかやけになのはテンション高いな……」
「うんなのはママじゃないみたい」
スウェンとヴィヴィオはなのはの後をついて行く

番外編4話久しぶりの風

「ただいまお父さん、お母さん」「お帰りなのはそれにスウェン」「あらヴィヴィオもいるのね」桃子と士朗に言われスウェン達は部屋へあがる
「何か懐かしいね、この部屋」「そうだな…」
「どうしたのスウェンパパ元気ないね」「いや別に平気さ何でもない」
スウェンは悲しそうな眼をしながら空を見上げるその頃フェイトの家
「ふう、疲れたでもスウェンとなのは何時の間にあんなに仲よくなつてたんだろう?」
フェイトは考えながらビールを飲む
「私もしかしたらスウェンに嫌われたのかな…」
フェイトはスウェンに電話しようと留守番電話が入っているのに気づく
「この電話番号はスウェンから?」
フェイトは電話を聞くと急いで家を飛び出し海鳴へと急ぐ
「なのはちゃんとスウェン君元気そうでよかつた」「すずかちゃんも全然変わつてないね」
二人が話してるとアリサが来る
「二人とも何時の間に結婚なんてしたのよ」「さすがに情報が早いね~」
なのはが言うとスウェンは一人を見る
「どうしたのよスウェン」「いや何でもないそれより俺は用事を思い出したじやあな皆」
スウェンは手を振りどこかへと転移する

番外編5話仲直り？

スウェンは公園に来ていた

「フェイト聞いてくれたかな」

スウェンが待つているとフェイトが来る

「ごめんねスウェンあのときは急にコーノに呼ばれたからさ」

「俺の方こそ勝手にいろいろ考えて何も言わずに海鳴に来ちゃって」

スウェンが言うとフェイトはベンチを指さす

「初めて会ったときもこのベンチに座ったよね」

「俺は最初フェイトの事をアリシアだと思つたしね」

「私もスウェンを見たときなんか懐かしい感じがしたんだ」

フェイトは笑う

「でもフェイトがアリシアのクローンだと知った時は驚いたな」

「私が倒れた時スウェンは私にずっと念話を送つてたよね」

「一度と俺の目の前で大切なものを無くさないためさ」

「あのとき嬉しかったそれから闇の書事件で私達の敵にまわりはや
てを守つたよね」

フェイトが言うとスウェンは下を向く

「別に怒つてる訳じゃないよそれに最終的には私達と一緒にリイン
フォースと戦つたしね」

「ありがとうなフェイト」

スウェンが言うとフェイトは顔を赤くしながらスウェンに言つ

「スウェン結婚式はいつにする？」

「いきなり何言つてんだフェイト」

「やっぱり私じゃなくてなのはのほうがいいの？」

「そう言う訳じゃないが…何と云つがあるの…その」

スウェンは顔を赤くして言つ

「本当に俺でいいのかアリシアの頃の記憶じゃなく今のフェイトの

想いだぞ」

「私の想いに偽りはないよスウェン今も昔もね
フェイトが言うとスウェンはフェイトに渡す

「この綺麗な羽をなんなの？」

「ノルンから受け取ったプロポーズの証なんだよ
スウェンが言うとフェイトはスウェンにキスをする

「スウェン大好きだよ！－

「フェイトこれからもよろしくな

二人はその後しばらくベンチに座っていた

番外編6話いろいろな事情（前書き）

番外編5話から2ヶ月後の話です

番外編6話いろいろな事情

「今日の訓練はここまで各自、今回の事をまとめて俺かなのはに見せるように」

スウェンが言うと訓練生たちは元気良く頷く。スウェンは落ちていることを拾い自分の仕事場へと戻る

「どうだった。今回の訓練生たちは？」

「呑み込みが早いのは助かるが逆にすぐにそれを試そうとするのだけは止めてほしいな」

「にやははは仕方ないよ。やつぱり好奇心には勝てないんだから」「でもなあ～今ままじゃ危なくって実戦には出せないな」

スウェンとなのはが話してると訓練生の一人が来る

「失礼しますチームのレッカ・ザンです。レポートを見せに来ました」

「すいぶんと早いね」

「レッカ、お前はもう実戦でも通用するのになんで訓練生のままなんだ？」

「私はまだ弱いですしそれに…」

レッカは顔を赤くするなのはそれを見ると笑顔になりレッカに近づく

「確かに君の戦闘スキルは他の人を抜いて訓練生の中じゃトップクラスだね」

「はい。ありがとうございます」

「それじゃ少しだけ話が聞きたいから付いてきてくれる?」

「はい…了解しました」

なのははスウェンに後の仕事を押し付けレッカと共に部屋を出て行く

「それじゃまず聞きたいのは君はスウェン君に恋をしてるね」

「えつ…いや別に…」

レッカの顔は赤くなる

「隠さなくともいいよ。私も好きだからね」「えつそなんですか。いつも一緒にいるからもう夫婦だと思つてました」「そう思われても仕方ないよね。名字が同じだから…」「それじゃ兄妹なんですか？」

レッカが聞くとなのはは寂しそうな顔になる
「血縁関係も何もないよただの友達だからね」「つまりたまたま名字が同じだけですか？」

「私が住んでいた地球だとスウェン君は私と家族なんだよ」

「それってつまりこっちの世界では何の関係もないけど向こうの世界だと家族そう言つ事ですよね」

レッカが言うとなのは頷く

「それに今スウェン君はフェイトちゃんと付き合つてるしね…」「そうだったんですね？」

「やつぱり知らなかつたんだね。だから安心して本局の魔導師にな

るといいよ」

なのはが言つとレッカはなのはを見る

「私、本局の魔導師になつてなのはさんの部下になりたいです」

「スウェン君じやなくて私でいいの？」

「はい！…」

レッカが元気よく言つとスウェンが来る

「なのは、レッカもう今日はこないし3人で何か食べに行くか」「えつでも何の祝いでもないよ」

「まあいいじやねえか細かい事はよさあ行こうぜ！…」

なのはとレッカは訳の分らぬままついて行く

番外編7 話届かない思い

「さあ着いたぜ」

スウェンに連れられなのはレッカはミシーデチルダの中でも一、二を争う高さのレストランへと来ていた

「なんでこんな場所に…」

「いいから入れよ」

「でも我还是未成年ですよ」

「平気だ俺も酒は飲めないからな」

スウェンは笑顔で言いつと店員の傍にいく

「本当はフェイトちゃんと来よつとしたんだよね」

「多分そうでしょうね」

レッカが言つとスウェンが戻つてくる

「さあ行くぞ」

「あつ…うん」

一人はなかなか言い出せず席へと着く

「それではご注文がお決まり次第こちらのボタンでお呼びください」

「わかりました」

スウェンはお礼をしてメニューをなのは達に渡す

「ほら一人ともメニュー」

「ありがとう…」

一人はメニューを見ながらちらちらスウェンのほうを見る

「どうしたんだ。俺の顔に何か付いてるか？」

「いや…そうじゃないけど」

「じゃあどうしたんだよ？」

スウェンが聞くと一人はメニューで顔を隠す。スウェンは訳の分からないまま首を傾げる

「それより注文するもの決まつたか？」

「うん…一応」

二人が言うとスウェンは店員を呼び注文する

「俺は酒は飲めないけどなのはは飲めるだろ?」

「うん平気だけど…」

なのはが言うとスウェンはなのはに紙を渡す

「ここのお酒はドリンクバーと同じだからなそのチケットを見せれば無料で飲み放題だぜ」

「そりなんだ…」

なのはは席を立ち向かう

「レッカは本局の魔導師になる気はないのか?」

「一応あります」

「ならもう訓練生じゃなく魔導師になる為の試験受けろよ」

「でもまだ私は本来の魔導師見たくあんなにつまく戦えないし何よりスキルがまだ駄目駄目ですから」

レッカが言うとスウェンは紙を出す

「俺となのはの推薦状だそれだけ期待されてるんだぜ」

「でも…私はまだスウェンさんやなのはさんには教わりたいです」

「一つ言つとくけどな俺たちの本来の仕事は時空管理局の魔導師の教導だぜ」

「そうだよ~それに訓練生の時よりも私達と会つ機会も増えるしね」

なのはが言うとレッカはなのはの持つてきたお酒の量に驚く

「おい…その量本気で飲む気か?」

「当たり前よ~それでレッカちゃんは気持ちが変わった?」

「はい…私、時空管理局の魔導師を目指します!…」

「そりかそれじゃここに連れてきて正解だつたな」

スウェンが笑うとなのはは聞く

「そり言えばなんでここに連れてきたのやつぱりフュイトちゃんに断れたから?」

「何でもかんでもフュイトのせいにするな!今日はフュイトは関係ねえよ」

スウェンは顔を搔きながら言う

「今日は…別に深い意味はないただ喜んでほしかったそれだけだ」
スウェンが言うと料理が運ばれてくる

「まあ食つか

「そうだね」

「はい。戴きます」

3人とも夢中で料理を食べて行く

番外編8話自分にひとつ大切な日々

「今日はありがとうございました」「ああ、気をつけて帰れよ」
スウェンは手を振りレッカを見送る
「さてと…なのは起きろ」「ふにゃ～あれもう朝？」
「いや違うから…そうじやくて帰るぞ」「どこに～スウェン君の家？」
なのはの[冗談を無視しなのはの家へと行く
「確かヴィヴィオがいるはずだな…」
チャイムを鳴らすと意外な人物が現れる
「あれスウェンどうしたの？」
「なんで…フレイトがなのはの家に？」
「ヴィヴィオに呼ばれたんだよそれに一人でお留守番なんて危ない
しね」「そうか…」
スウェンはなのはを降ろす
「何がずいぶん酔ってるね」「なのはママ起きて…！」
ヴィヴィオはビンタをする
「あれ～おはようフレイトちゃん、ヴィヴィオ」「おはようなのはでも今は夜の10時だよ」「そうなんだ～」「俺そろそろ帰つていいか。明日までに出でなきやならない課題もあるし…」
スウェンが言うとフレイトはスウェンのほうへ来る
「私も帰らうかななのはも戻ってきた訳だし…」「フレイトママとスウェンパパ帰るの？」「

ヴィヴィオは寂しそうな顔をする

「でもあのなのはに任せておけないよね」

「そうだな今日だけは泊まるか」

「でも課題はいいの?」

「どうせ怒られるのは俺だけだなら別に今日じゃなくてもいいしな」

スウェンが言うと、ヴィヴィオは笑顔になる

「久しぶりにスウェンパパと寝れる」

「ヴィヴィオ寝るのはいつもと同じくのはじだよ」

「やだやだスウェンパパと寝る~」

フェイトが怒鳴るとスウェンはフェイトの肩を叩く

「別にいいじゃねえかよフェイト」

「でも…教育上悪くないかな?」

「平気だと思う多分」

「ならいいけど…」

フェイトが言うと、ヴィヴィオは抱きつく

「それで俺たちはどこで寝れば?」

「一応私達の隣の部屋が空いてるよ」

「そうかじゃそこで寝るけどフェイトは?」

「私は前見たくのはと寝るよ」

フェイトはスウェンに手を振りなのはを布団へと連れて行く

「ヴィヴィオね~スウェンパパに話したいことたくさんあるんだ」

「ヴィヴィオ学校は楽しいか」

「うん!~」

ヴィヴィオが頷くとスウェンはクライスソウルの整備を始める

「スウェンパパデバイスの整備できるんだ」

「まあ一応はなそれにこのデバイスは特殊なデバイスだから俺以外は整備できないしな」

スウェンはクライスソウルを整備しながら言つ

「ねえスウェンパパにお願いがあるんだ」

「何だよ…」

「ヴィヴィオ用のデバイス作つて~」

「無理だな第一なのはの許可がねえと、ヴィヴィオのデバイスは作れ

ねえんだ」

スウェンは頭を搔きながら言つ

「まあ後の話は明日にしてもう寝るぞ」

「お休みスウェンパパ」

電気を消しスウェンは眠りにつく

「う~頭がガンガンする~」
「まあ、あれだけ飲んだら誰だつてなるわな」
スウェンは朝ごはんを作りながら言つ
「おはようスウェン、ヴィヴィオは?」
「ヴィヴィオならもう学校に行つたよ。なんでも今日は何かあるとかで」
「あつ…忘れてた…」
なのはは急に大声を出す
「どうかしたのなのは?」
「スウェン君すぐに着替えてきて」
「こきなりどうしたんだ?」
スウェンが聞くとなのはは今日の予定を話す
「なるほどそれじゃこの恰好じや不味いな」
スウェンは自分の家へと転移する
「今日、何があるの?」
「ヴィヴィオの学校で魔法の説明会?」
「つまり授業を教えに行くんだね」
フェイトが言うとなのははフェイトの肩を掴む
「そこでお願いがあるんだフェイトちゃん」
「何…」
「私達と一緒に来てくれる?」
フェイトは悩んだ末に頷く。それから20分後
「ごめん…遅れた」
「いや俺も今来たところだしでも平氣かなのは」
「うん問題ないよ」
「私も来てるし今のところは平氣だと思つけどね」
フェイトはなのはを背負い職員室へと入るスウェンもその後に続き

入る

「今日、魔法の授業を教える為に来た時空管理局の魔導師です
みんな楽しみにしてますよ今回はお願ひしますね」

「はい！」

フュイトは返事をして外に出る

「う～気持ち悪い」

「なのは、決して吐かないでよ。魔導師として堂々とするんだよ
「そうは言つてもね気持ち悪いものは気持ち悪いの」
「仕方無い。ほらなのはこれ飲んで」

スウェンは何かの薬をなのはに渡す

「これ何？」

「いいから飲んでそうすれば楽になる筈だから」

スウェンに言われなのはが飲むと体調が完全回復する

「これで一応は平氣だろ」

「ありがとうねスウェン君！」

なのははお礼をしてヴィヴィオ達の待つ場所へ行く

「それでは講師の先生を呼びますね」

先生が詰つと2人の時空管理局の魔導師が来る

「この一人は数々の事件を解決し、今じやその名を知らぬものはい
ないとまで言われた魔導師です。それでは自己紹介してもらいまし
よう」

先生にマイクを渡され二人は自己紹介を始める

「私は高町なのはです皆さんよろしくお願ひします」

「俺は高町スウェンです今日はよろしく」

なのは達が自己紹介をすると生徒たちがざわざわする

「あれつて確かヴィヴィオちゃんのお父さんとお母さんだよね
「でも何かずいぶん若い気がするけど」

「それより本当に強いのかな」

皆が話してると先生が止める

「はいはい。お話はそこまでにして話を聞きましょう」

先生が言つとのはは話し始める

「これが魔法を使用する際に使うデバイスです」このデバイスにもたくさん種類があります一般的に使われているデバイスはストレージデバイスと言つてAIを組み込んでいないデバイスです

その後もどんどんと言い授業が終わると恒例の質問コーナーが来た

「何か質問のある人はいるかな」

なのはが聞くとほとんどの子が手を挙げる

「それじゃ君立つて発言してくれる?」

「魔導師になるにはどうすればいいですか」

「それは色々あるよ例えば学校に入つて勉強をしてなる方法それから現在時空管理局で働いてる魔導師からの推薦状とかね」

なのはが言つと男の子は座るその後も質問を受けては答えるを繰り返し授業は終わる

「ふにゃ～疲れた～」

「お疲れなのは、スウェン」

フェイトなのはとスウェンに飲み物を持つてくる

「それでうまく行つた?」

「うん、一応ね」

なのははジューースを飲みながら言つ

「それでこの後どうするんだ?」

「はやてがここまで来てくれだつて」

「いつ：居酒屋かよ～」

「にやははスウェン君の酒飲めないもんね」

なのはとフェイトに笑われながらスウェンはついて行く

「本当に居酒屋かよ~」「確かにやはやはお酒好きだもんね」
「フエイトとなのはは帰ろうとするスウェンを掴み中へ入る
「お待たせ~はやてちゃん」「ずいぶんと遅かったな今日はちゃんどできたか?」「うん、一応はねでもなんで居酒屋なの?」「何か日本にいる時の事思い出してな急に来たくなつたんやはやてが言つと「ウが来る
「はやてそろそろ始めたいんだが準備はいいのか?」「もう始めてええですぐに行くからな」「了解した」
「ウは敬礼をして出て行く
「はやてとウうまく行つてゐみたいだね」「フエイトちゃんとスウェン君やつていい感じやないか」「でもまだスウェンは惱んでるんだと思つんだ」
フエイトが言つとはやは驚く
「つまりまだなのはちゃんとフエイトちゃんで惱んでるそつ言つた
いんやな」
「单刀直入に言えばそうだね」「でもそればっかりはスウェン君本人に聞かないとわからんな
二人が話してゐとなののが呼ぶ
「今日ではつきりさせねばええやないか」「そうだね~」
フエイトとはやはても席に着く
「スウェン君~お酒飲まないの?」「俺は酒は無理だからな
スウェンが断るとはやはが来る

「はつきり言つても、おつかスウーン君」

「なにをだ？」

「なのはちやんとフロイトちやんビッチが好きなのかや」

「！－！」

スウーンは驚き危うくロップを落とすといふだつた

「いきなり何の話だよ」

「だから結婚するなりフロイトちやんとなのはちやんビッチかつていう話や」

「それ今言わなきや駄目か…」

「当たり前やん」

はやてに言われスウーンは「惑つ

「」の宴会が終わつたら教える」

スウーンはそう言つと外に出る

「俺の未来か…」

スウーンが考へてるとフロイトが来る

「こきなり飛び出すからびつくりしたよ」

「悪い…フロイト

スウーンの目には涙があふれていた

「どうしたのスウーン？」

「いや何でもないただ日に「ミミ」が入つただけだ」

スウーンは目をこすりながら言つ

「私はスウーンがなのはを選ぼうとも後悔はしないよ」

「俺は…」

スウーンは心の中では決まつてゐるのに言いだせないでいた

「私はスウーンの友達としてサポートするから」

フロイトが笑顔で言つとスウーンはフロイトを見る

「どうしたのスウーン？」

「フロイト受け取つてくれるか…」

スウーンから渡されたのは綺麗な七色の羽だった

「あの最終決戦の後ノルンに渡されたんだ。あなたと運命を共にす

るものに渡せつてな」

「それじゃこれはプロポーズでいいんだよね」

「やう取ってくれて構わないぜ」

スウェンが言うとフォイトは抱きつくれからはやて達に説明をしてスウェンは自分の家へと帰った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418m/>

続・聖剣士伝説リリカルなのは

2011年4月8日16時43分発行